

「学習者の声」からスタートする「読み」の学習

新しい指導を考える会

1 学習者の視点に立って

『故郷』は、中学三年生の定番ともいえる文学教材である。現行教科書でも、五社すべてが採録している。この作品に強い思い入れをもつ国語教師も少なくない。しかし、学習者の日常の読書生活の変化と個人差の拡大が急速に進む中で、教える側の意識と学習者の実態の乖離にとまどう指導者も多い。今一度、学習者の視点からこの作品を見つめ直し、学習抵抗や興味・関心を踏まえた『故郷』の多様な学習のあり方について考えることが必要である。本稿では、これまでの指導経験と本年度の三年生からとったアンケートの結果を踏まえ、学習者の声を生かした『故郷』の学習展開について考えたい。

2 学習者アンケートの結果から

筆者は三年生二クラスを対象に、学習者の『故郷』に対する読みの抵抗と、興味・関心の程度や所在に関する次のような簡単なアンケートをとった。

| | | |
|---|--|----|
| 1 | この作品は、難しいですか。 | |
| ア | 難しい | 17 |
| イ | やや難しい | 48 |
| ウ | やややさしい | 4 |
| エ | やさしい | 0 |
| オ | その他(希望について) | 1 |
| カ | 作品の時代背景や作者 | 5 |
| キ | その他(希望について) | 1 |
| ク | 興味をもった登場人物とその理由を書いてください。 | |
| ア | わたし | 29 |
| イ | 母 | 2 |
| ウ | ルントウ | 27 |
| エ | ヤンおばさん | 8 |
| オ | その他(ホルとシュイシオン) | 2 |
| カ | 描写・表現 | 3 |
| キ | 情景 | 6 |
| ク | 主題・テーマ | 9 |
| ケ | (人物像・生き方・心情など) | 28 |
| コ | 登場人物 | 16 |
| カ | ストーリー展開 構成 | 16 |
| キ | この作品で最も興味を感じたこと、授業で学習したいことは次のどれですか。 | |
| ア | おもしろい | 6 |
| イ | ややおもしろい | 26 |
| ウ | あまりおもしろくない | 26 |
| エ | おもしろくない | 8 |
| オ | その他(希望について) | 1 |
| カ | 場面ごとに三人称視点に書き換える。 | |
| ア | 「わたし」の思いや登場人物の動きを外の目からとらえることで、ストーリーを明確にとらえさせることができる。 | |
| イ | また、書き換えという作業を設定することで学習に集中させることもできる。 | |
| ウ | このようなストーリーの把握のための学習では、班で教え合い、学び合う場をぜひ設定したい。 | |
| エ | 次の感想は、最初ストーリーがとらえられなかった生徒が、学習を通して理解を進める様子をつづつたものである。 | |
| オ | 僕は、はじめて『故郷』を読んだとき、わけが分からなくてつまらない話だなあと思いました。けれど何度も読 | |

アンケートは、指導者および比較的読みの堪能な生徒の意見を聞かせて作品に導入した後、続きを各自に黙読させてからとった。各項目ごとに回答の理由等もコメントさせたが、ここでは問いごとに各選択肢を選んだ数のみを示す。回答者は六九名である。

これを見ると、約四分の一の学習者が「難しい」、七割近くが「やや難しい」と回答している。指導者はまず、『故郷』は学習抵抗の大きい作品であることを押さえなければならぬ。「難しい」と回答した学習者の大半は登場人物の関係やストーリー展開そのものが把握できていない。語句への抵抗も強い。また、2以下の問いが無答の学習者は、根気が続かず最後まで読み通すことができなかったための無答であった。従来から『故郷』を難しいという学習者は少なくなかったが、多くは「偶像崇拜」「希望」「道」といった語句に込められた意味が理解できないという生徒たちであり、あるいは、主題把握の難しさを訴える生徒たちであった。「難しさ」の質の変化を踏まえた指導が求められている。「やや難しい」と答えた学習者のコメントにも、「難しい」と答えた学習者と同様のものが多い。しかし、人物相互の関係やストーリー展開を理解した上で、前述の語句の意味の難しさを訴えるものや、主題を問題にしたものが増える。

また、興味・関心の程度について見ると、「おもしろい」「ややおもしろい」と答えた学習者が約半数で、学習者の感想は二分される。これを踏まえて指導に臨む必要があるといえる。興味をもった人物では、「わたし」と「ルントウ」の二人に集中している。

このような実態を押さえた上で、学習者の側に立った多様な学習のあり方を考えたい。

3 ストーリーをとらえることそのものを目標とした読み

ストーリーをとらえることは、作品を読み深め、主題に迫る

ための前提として位置付けられ、比較的簡単に扱われることが多い。しかし、ストーリーがとらえられない学習者の増加を考えると、このこと自体を目標にした学習活動を明確に位置付けることも、『故郷』の学習指導の大切なポイントとなる。すなわち、現在進捗しつつある物語と回想場面との関係の理解、登場人物の関係と作品展開の理解、現実の世界と視点人物の思索との関係の読み取り等は、読解力および思考力育成のための重要な指導事項となる。

学習課題の設定にあたっては、「あらすじを書かせる」というだけでなく、次のような工夫をしたい。

(1) 映画やテレビドラマにするための絵コンテを作成する。

映像に関心のある学習者は多い。このような課題を提示し、楽しみながらそれぞれの場面をイメージ化して作品世界をとらえさせていく活動は、ストーリーを把握しながら、情景をより鮮明にイメージ化させていくことにつながる。

(2) 場面ごとに三人称視点に書き換える。

「わたし」の思いや登場人物の動きを外の目からとらえることで、ストーリーを明確にとらえさせることができる。また、書き換えという作業を設定することで学習に集中させることもできる。このようなストーリーの把握のための学習では、班で教え合い、学び合う場をぜひ設定したい。

次の感想は、最初ストーリーがとらえられなかった生徒が、学習を通して理解を進める様子をつづつたものである。

僕は、はじめて『故郷』を読んだとき、わけが分からなくてつまらない話だなあと思いました。けれど何度も読

んでいくうちに、ちよつとずつ意味が分かってきました。子どものころ仲のよかったルントウと、故郷にひさしぶりに帰ったときに会って、自分とルントウの間に大きな壁ができてしまったことがとてもかわいそうだと思いました。

4 人物や場面を選び、読み取り検討する読み

それぞれの学習者が興味をもった登場人物を選び、その人物形象を丹念にとらえるとともに、その生き方やその人物にそのような生き方を強いた状況等を考えさせることも、作品『故郷』に学習者が意欲的に取り組み、読む力を高めることに結びつく学習である。

『故郷』の学習では、作品を難しいと感じ、暗いトーンに抵抗をもつものの、少年時代のルントウには強い魅力を感じ、スイカ畑のチャーとの場面に引きつけられる学習者も多い。この場面を、想像力をふくらませ、表現を丁寧にとりながら鮮やかな絵としてとらえることも、文学を楽しむを味わわせ、読書の幅を広げ、読む力を高めることにつながる。その手だてとして、チャーの絵を描かせることも楽しい学習となる。下図は、学習者の描いたチャーのいくつかである。

「わたし」にとって羨望の対象であった少年時代のルントウを形象として鮮やかに思い描くことは、再会後の変わりようとして、「わたし」の落胆やルントウの悲しみをとらえる上でも重要である。

「わたし」の思想や生き方、そして「わたし」の抱える自己矛盾を読み取ることは、より高度な読みの力を必要とするが、学むことができれば、学習は深まる。ヤンおばさんやホルとシユイションに着目させるのもよい。

また、好きな場面をとらえるという課題を設定し、そこを核として作品全体を読み深めていくという学習もおもしろい。先の少年時代のルントウの場面や、「わたし」とルントウの再会の場面、とりわけ「だんな様」という「わたし」にとって衝撃的な言葉がルントウの口から発せられる場面などは、学習者の関心も高く、密度の高い学習が可能になる。この場面の学習では、次のような方法が工夫できる。

- (1) 「だんな様」という言葉の読み方を考えて朗読し、それを検討し合う。
- (2) 視点人物をルントウにして作品を書き換える。
- (3) 「わたし」・ルントウ・ナレーターとの役割を分担し、劇化を試みる。

5 語句の意味を考える読み

難解語句や重要と思われる語句、深く考えてみたい語句を選び、辞書で調べ、文脈に即してとらえ、さらに自分なりにその言葉について深く考えさせることも、分かりたいという学習者の願いを踏まえた深まりのある学習となる。「厚い壁」「偶像崇拜」「希望」「道」など、ともすれば指導者が長い説明をしたり、誘導尋問的な問いを重ねていたりする場面を見受けるが、これは極力避けるべきであろう。

また、語句を出てきた順に扱うのではなく、学習者が興味をもった語句を選び、グループで話し合わせるのも一案である。ここでは、話し合いのテーマ設定を工夫させたい。次は、ヘルン



▲学習者の描いたチャー

習者の関心も高く、ぜひ取り組ませたい課題である。ここでは、「わたし」は、視点人物あるいは語り手であり、作者ではないという前提をまず押さえさせたい。

「わたし」は、「偶像崇拜」を批判し、「希望」を語る。しかし、現実を変革しようとする彼自身の行動は作品世界には表れない。考える人ではあっても、行動する人ではないのである。昔のように接したいと言いつつ、ルントウに自分で飯をいためて食べさせる。それは、無意識に行われる目下の者への言動以外の何物でもない。このあたりにも目を向けさせ、討論を仕組

トウの希望・「わたし」の希望・そして〜というテーマで話した学習者の感想の一端である。

○わたしは、「ルントウ」のような希望は、やっぱりいやだ。「今」という時間に立ち止まって、足踏みばかりしているのはあまりにもむなしい。やはり、人は前へ進まなくてはならないと思う。

○作品の中で「わたし」は、希望とは信じれば現実になると言っている。これは、中国が暗い時代にあつたときに書かれた作品だからだろう。でも、僕は、現実になるものとならないものがあるように思う。希望を強く思えば、そうなるように努力する。努力して努力して努力して現実実に近づいていく。でも、努力しても絶対に無理なものもある。

○「希望」とは、そんなに簡単にかなわないものだ。「わたし」は言う。賛成だ。簡単になんか言うことを、大げさに希望するだろうか。私たちは、少し「希望」という言葉をひんぱんに使ひすぎるのだ。私たちの言っている「希望」とは、自分でしようと思つたら実行可能なことを、「あなればいい、こうなればいい」と思っているだけだ。規模が小さすぎる、自己中心的なものばかりだと思ふ。もっと、みんなで個人ではできないことを可能にしようとする気持ちが大切だ。

『故郷』は、多様な読み方、多様な学習の可能な作品である。事前調査や初発の感想等を踏まえ、学習者の視点に立つて様々な学習を工夫したい。